
とある科学の十字障壁< クロスロード >

あくせる

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の十字障壁へクロスロードへ

【Zコード】

Z3903X

【作者名】

あくせる

【あらすじ】

呪われた力を持つ少年と、穢れた運命に呪われた少女。科学と魔術が交差するとき、物語は始まる――

序章 絶対と選択の狭間

*

一瞬の出来事だった。

空間をも歪めた絶対「コウゲキくは轟！」と爆音を撒き散らし、地面を抉り取る。

地面から巻き上がった砂埃が少女を包み込んだ。

「やつた……。これで死んでなかつたら可笑しいでしょ」

しかしそんな言葉とは裏腹に、女の子の表情は優れない。
心が晴れることは、無い。

黒に染まりかけた心に光が射し込むことは……無い。

もうあの少年が起き上がる筈がなかった。少年は物言わぬ肉塊と化した筈。

……もつあの少年が自分に笑いかけることはない。

少年の全てを忘れさせてくれるような柔らかな微笑み。それを見ることはない。

少女はそれをしっかりと自分の胸に覚えていた。

ついわざりまでそれは自分に向けられていた事を。その微笑みは何故か少女の心に痛みを与えた。

……少女には笑顔を向けられる資格は持ち合わせていないのに。

そして少女はそんな心優しい少年を殺してしまった。

それはとても残酷な事だと思つ。何故なら少女が行つたのは喧嘩でもなく、暴力でもない。

一方的な殺戮。

それで全てが壊れた。

なのに。

次の瞬間、砂埃が吹き払われた。

少女の耳の前に現れたのは、まるで耳にいることを錯覚させるようなクレーター。

そして、その中心に確かに少年が立っているのを少女は見た。

しかし、その少年は無傷ではなかった。制服は泥にまみれて、擦りきれていた。額からは血を流していた。わづ、ボロボロだった。

しかしそれでも少年は折れる事なく、自分の一本の足でしつかりと地面の上に立っていた。

「…………んで」

少女は田の前の存在を認められる事は出来なかつた。

「なんで倒れないのよー。」

どうしようもない運命を、軽々と飛び越えてしまつようなどんな田の前の存在を。

「なんで死んでないのよー。あんな化け物みたいな攻撃を喰らつてなんで平然と立つていられるのー！お願いだから私を怪物のままでいさせて。お願ひだからもう私の前に立ち塞がないでよオオおおおおー！」

言葉が返つてくる。眼前で拳を握る、ボロボロの少年から。

「……そんなこと関係無いだろ」

少年は言葉を噛み締める。

「なんでテメエーが怪物でいなればいけない？」

空気が叩かれ、地面が炸裂し、少年の血が飛び散った。ガクッ、と少年の体が揺らぐ。

「俺にはテメエーが怪物だなんて思えない」

少年は走る。田の前の怪物に向かって真っ直ぐに。

「テメエーが何でその答えに辿り着いたのか、俺には解んねえ。わかんねえよ！でも、テメエーが怪物でいなればいけない理由なんて無いはずだ！そんな残酷な答えにテメエーがしがみつく必要だって無いはずだ！」

爆音が撒き散らされた。

土が空高くへと飛ばされた。

それでも少年は止まらない。何度吹き飛ばされても、何度地面に叩きつけられても、幾度も倒れされても、前へ前へ走り続ける。

「……それでも私が怪物だって事に変わりはないんだからー！あんたに解るはず無いー！あんたに私の気持ちなんて解るわけ無いんだからー！」

少年のすぐ横の地面が削り取られ、飛び散る砂利の弾丸が少年の体を貫く。

しかしそれでも少年は止まらない。

もう一度と少年は倒れない。

倒れていい理由>ワケ<くがない。

「……解るわけ無いだろ」

少年は言葉を噛み締める。心内の言葉を吐き出す度に少年の力は増す。

「ここで俺が倒れたら誰が彼女を救う？」

「テメエーが話してくれなきゃ解るわけ無いだろッ！！テメエーがそんな主人公>ヒーローくみたいな人間に見えるか？？そうだよ。俺はどうせ脇役みたいなつまらない人間だ」

少年は理解している。自分に与えられた役割を。それは主人公で無いといつことも充分理解し、唇を噛み締めた。きっと自分に彼女を救う資格はない。

「でもそんな俺でもテメエーが苦しんでる姿は見たくないって思つてんだよ！！俺は泣いている姿なんて見たくないんだよ！！俺はテメエーには笑つていて欲しいって思えんだよ！！」

轟音が炸裂した。

少年の立っていた場所が爆発し、大量な土砂が巻き上げられた。

例え爆発を防げたとしても、巻き上げられた大量の土砂に巻き込まれてグシャグシャの肉塊に変わるはずだった。

しかし。

ブォン！！と少年は土煙を吐き払い、真っ正面から風を斬り突つ込んで来た。

あり得ない。あれはそんな生易しい攻撃ではない。根性とか、負けん気などでは決して防げる訳がない。

そして少年が少女に接近する。

「それでもテメエーがそんな歪んだ考えが捨てられないって言つたら

少年が少女の懷に踏み込む。

少年の拳が握られる。この上なく強く、強く、

強く。
強く。

「取り敢えずテメエーのやの歪んだ考えは今こい」で

殴り飛ばすッ
！！

ドン、と重い一撃が少女の顔を捉えた。

少女の軽い体は、空を舞うタンポポの綿毛のようて吹き飛びコンクリートの剥げた剥き出しの地面に投げ飛ばされた。

少女が怪物だと蔑んだ最強の能力「チカラ」は、ただの平凡な脇役で最弱な少年には通用しなかった。

それには理屈も、理由も、根拠も何もない。

ただ少年は少女の泣く姿が見たくないと言った。

その為だけに少年は怪物と戦い、勝利した。

少女は赤く腫れた右頬を擦りながら、思つ。

……自分は今まで泣いていたのだろうか。

涙なんてとつぐの昔に枯れてしまつたといつのこと。

涙腺なんてとつぐの昔に錆び付いた筈なのに。

その時、仰向けに倒れている少女は、桜の花びらがヒラヒラと宙を舞つている事に気が付いた。

その綺麗な桃色の花弁は何故か薄く霞んで見えた。

そして気付いた。

……ああそつか。

自分は泣いているのか。

少女の鎧が付いたと思っていた涙腺からは透明な鎧が流れ落ちていた。

「……こんな私でも皆の隣にいていいのかな」

少女は呟いた。

そしてボロボロの少年は一瞬の間も置かずに、清々しい笑顔を見せながら答えた。

「……なんて最低な答え

少女は呟いた。その言葉とは裏腹に笑みを浮かべながら。

少年はそれに答える代わりに仰向けに倒れている少女に右手を差し伸べた。

呪われた運命を持つ少女と、呪われた力を持つ少年が交差する
とき物語は始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3903x/>

とある科学の十字障壁<クロスロード>

2011年11月23日14時48分発行